

が県外への転校で減少したため、教員の定数

広野で震度5弱

第一、第二原発異常なし

福島 震度3

気象庁によると、十三日午前零時二十五分ごろ、本県沖を震源とする地震があり、広野町で震度5弱、いわき市、相馬市、南相馬市などの浜通りや郡山、白河両市などで震度4、福島、伊達、二本松、須賀川、会津若松各市など広い範囲で震度3を観測した。震源の深さは約二十キロ。マグニチュードは5.6と推定される。

新たな分布図作成

文科省 測定地点と頻度増

文科科学省は二十二日、福島第一原発周辺の放射線量や放射性物質の分布図を新たに作成するなどと、午前十一分ごろに本県沖を震源に発生した地震で「環境モニタリング強化計画」を発表した。事故の全体像を把握

飯舘村長、川俣町長インタビュー

計画的避難区域の指定を受け、村全域が指定された飯舘村の菅野典雄村長と、山木屋地区が対象となった川俣町の古川道郎町長は二十二日、福島民報社のインタビューに応じ、現状や今後の対応などを語った。

菅野飯舘村長 村民を守りたい



菅野飯舘村長 菅野 道郎 長 菅野飯舘村長は、山木屋地区の子供たちを助けるために、どのような形で避難を進めるのか。村長は、

古川川俣町長 政府対応求める

「『までいの心』で村を必死に育ててきた。それが一瞬の原発事故で崩れていく。ただただ、悔しくてならぬ。今後の決意を。『村を再生させなければならぬ。ギブアップはしない。村民の政治を求めていく』



復興への思いを胸に練習に励むフラガール

情に即したきめ細やかな対応を求めている。政府と協議しながら避難計画をつくる必要がある。飯舘、川俣対策本部に国職員。政府の方針で現地政府対策本部が置かれる。計画的避難区域と緊急時避難準備区域の指定について、関係市町村の首長は一層の安全確保などを求めた。津島地区などが計画的避難区域に指定された浪江町の馬場有町長は「対象住民には安全

■環境モニタリング どんな傾向

大気中 (放射線量)	3月14日	3月15~16日をピークに各地で減少しているが、福島県の浪江町、飯館村では依然高い線量
大気中 (積算線量)	3月23日	浪江町、飯館村で高く、20 ⁺ シーベルト近い地点もある
土壌	3月18日	採取地点によりばらつきがあるが、最近では半減期が短いヨウ素の最高値が出ておらず、新たな大量放出がないことがわかる
海水	3月23日	第一原発から約35~60 ⁺ μシーベルトで採取。1地点で高濃度を検出するなどばらつきが大きい
雑草 池・雨水	3月18日	測定当初と比べ減り続けている
水道	同上	3月24日前後をピークに各地で減少し、現在は不検出か微量の検出にとどまる

日付は測定開始日。大気以外はヨウ素131とセシウム137の放射性物質濃度を測定

文部科学省、経済産業省、原子力安全委員会は22日、環境中の放射能汚染のモニタリング(監視)を連携して強化していくと発表した。今月中に大気中の放射線量の分布や積算線量の

放射線量マップ作成・調査地点増 モニタリング強化へ

国の3機関

内容を詰め、その時点あるいはそれに至る過程で考える」と説明。第2次補正予算案の本格編成は6月末以

と指摘。その上で、「二つと指し、その上で、二つ」を乗り越えていく道筋が見えてくれば、政治家としては本望だと述べた。

海洋については、文科省の観測地点を、原発から沖合60⁺付近までの12地点から南北に2点ずつ増やし、16地点とする。海面と海底から10層の海水を採取していたが、中間層の調査も行う。水産庁と連携し、海産物への影響も調べる。

土壌も調査地点を増やし、詳しい汚染マップを作る。結果は、農作物の作付けや校庭の利用などの可否を判断する参考データなどに使う。

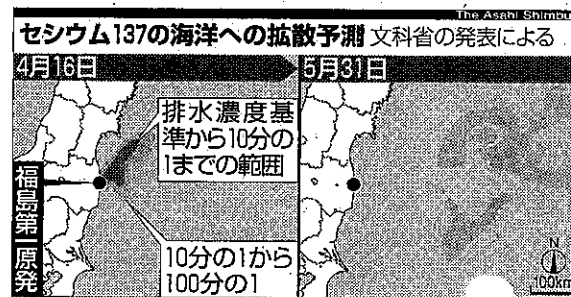
放射性物質の分布をはかり、「線量測定マップ」を作る。年間の被曝線量20⁺シーベルトを基準に、事故発生後1年間の積算線量の推定マップも作成。いずれも月内に1回目の公表を行い、月2回更新する。

各都道府県は福島第一原発事故の以前から、大気中の放射線量や放射性物質の降下物、水道水について計測している。ただ、調査地点は1カ所、文科省への報告も年1回だった。原発事故以降は、調査地点や回数を大幅に増やし、数値の推移を監視している。

モニタリングのデータは、避難区域や警戒区域の設定などに活用された。科学的根拠に基づいて、よりきめ細かい対策に役立てるためだ。実際にモニタリング結果から、浪江町や飯館村など原発から30⁺以上離れている地域でも、局所的に放射線量や土壌の汚染

計画的避難区域の設定では、放射線量の実測値をもとに、今後1年間の積算線量を試算。それまでは同心円状に20⁺圏内に一律設定していた避難区域を、年間積算量が20⁺シーベルトを超えると推定される地域にまで拡大した。

福島第一原発2号機の1⁺ピン建屋地下や坑道にまった放射能汚染水が、水口付近のコンクリートの亀裂から漏れ出していることが2日に見つかった。6日に止水するまで520⁺リットル流出し、4700兆ベクレルの放射能が含まれていたと東京電力は推定している。国の基準で定められた年間放射線量の約2万倍にあたる。高濃度汚染水の収容先確保するため、東電は4月10日に向け、敷地内の比較的濃度の低い汚染水1万93⁺リットルを意図的に海に放出した。放射線の量は15⁺億ベクレルと見積もられた。



4月16日には、排水濃度基準の10分の1までの比較的濃度の高い汚染水が北東に直線的に延びた(図左)が、4月中旬以降は、非常にゆっくると、やや南寄りや沖へ移動しながら広がった(図右)。(杉本崇)

高濃度汚染水の流出 どう

「最悪ケース」に 短期間での放射

高濃度汚染水の流出が、福島第一原発2号機の1⁺ピン建屋地下や坑道にまった放射能汚染水が、水口付近のコンクリートの亀裂から漏れ出していることが2日に見つかった。6日に止水するまで520⁺リットル流出し、4700兆ベクレルの放射能が含まれていたと東京電力は推定している。国の基準で定められた年間放射線量の約2万倍にあたる。高濃度汚染水の収容先確保するため、東電は4月10日に向け、敷地内の比較的濃度の低い汚染水1万93⁺リットルを意図的に海に放出した。放射線の量は15⁺億ベクレルと見積もられた。